

# Book Review

## やってみよう！ インプラントオーバーデンチャー

金澤 学・水口俊介 編



Reviewer

前田芳信 Yoshinobu Maeda

(大阪大学大学院歯学研究所 招聘教授、名誉教授)

A4判, 112頁

カラー

定価(本体8,000円+税)

医歯薬出版刊



このたび、東京医科歯科大学大学院の金澤 学先生、水口俊介先生らが出版された同書を早速読ませていただく機会を得た。歯界展望に連載されておられたときから、いつかテキストとなることを期待していたものである。

本書では、金澤先生の留学先でもある Jocelyne Feine 教授が McGill で開いたコンセンサス会議で下顎無歯顎症例に対し第一に選択する治療として提唱された「2本のインプラントを用いたオーバーデンチャー (2-IOD)」の製作方法から始まり、部分欠損症例における応用としてインプラントアシステッドパーシャルデンチャー (Implant Assisted Removable Partial Denture ; IARPD) に至るまで、著者らの豊富な臨床例と文献の考察を含めて解説されている。これから IOD に取り組もうとされる臨床家の方々だけでなく、無歯顎症例、部分欠損症例に対する選択を広げようと考えられている先生方にとって役立つテキストである。

本書の前書きにも書かれているが、IOD だけでなく OD、いわゆる天然歯を支台としたオーバーデンチャーに関しても積極的に臨床に取り入れておられる先生はまだまだ限られているように思われる。評者は、OD、IOD はともに周囲の顎骨の吸収を抑制でき、George Zarb らが提唱した生物学的コストを減少させ、補綴装置としての維持、支持、把持、安定が得やすい、臨床的に有効な選択肢であると考えている。

ただし、ここで忘れてほしくないのは、OD、IOD を成功させるにはコンプリートデンチャーの基本的な知識と製作技術の習得が前提になることである。その点、コンプリートデンチャーの専門家であるお二人だからこそその違いが、紹介されている症例のなかにかんなく発揮されていることを見逃さないでいただきたい。それは床縁の設定位置や、人工歯の排列位置など随所に妥協を許していないことからおわか

りになると思う。

さらに、そのような義歯としての高い完成度があって始めて、アタッチメントの選択が存在することも忘れてほしくない。OD、IOD はアタッチメントにすべての維持安定を依存するものではないからである。

もちろん OD、IOD ともに問題事象が起こりうる。本書ではそれもメインテナンスで何が必要になるかが解説されている。これらの問題事象をあらかじめ知っておけば、その予防や対応が容易になるのは間違いない。

本書には東京医科歯科大学の水口教室での研究成果が多く盛り込まれているが、「臨床に役立つ研究、臨床での判断基準を提供するための研究」という姿勢は、まさに評者自身が常に目指してきたことであり、今後さらに研究を積み重ねて臨床家が安心して OD、IOD に取り組めるようにしていただきたいと思っている。